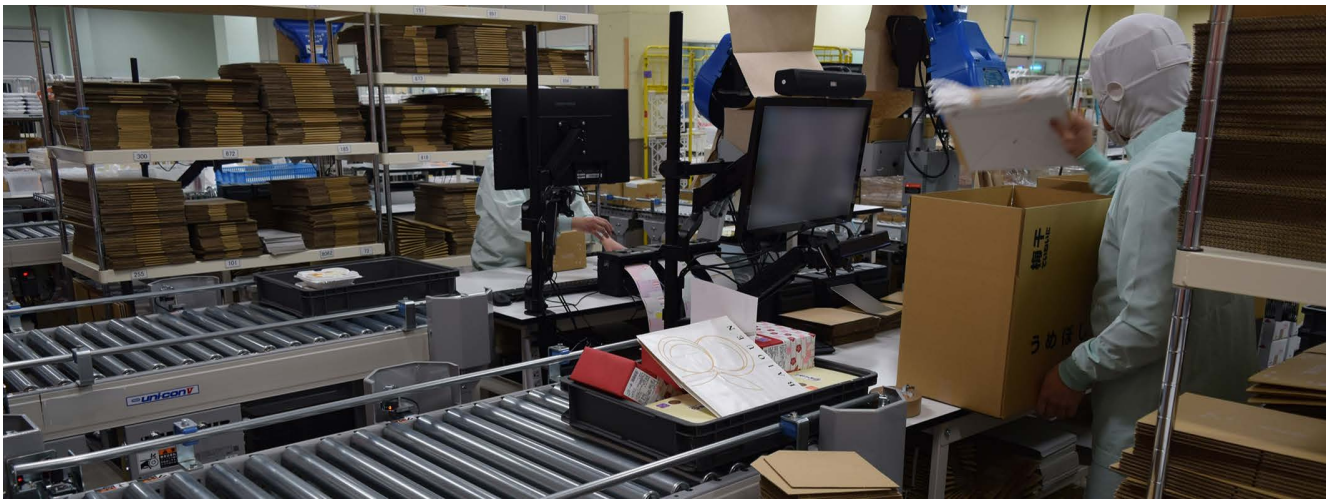


効率化設備を導入したのに、作業がしづらくなった
――現場の違和感から始まった改善事例

2026 年 5 月 21 日

和歌山県・みなべ町。
日本一の梅の産地として知られるこの地には、数多くの梅加工会社が軒を連ねている。
その中でも、ひときわ長い歴史を持つ企業がある。
昭和 17 年創業、紀州梅干づくり一筋に歩んできた「株式会社ウメタ」だ。
創業から 84 年。

ウメタの梅干は、全国の百貨店の贈答品コーナーをはじめ、スーパーやオンラインショップを通じて多くの人々の食卓へと届けられている。

本社工場には観光バスも立ち寄り、見学やお土産購入を楽しむ人々で賑わう。地域に根ざしながら、全国へ価値を届ける企業である。

そんなウメタが、ある転機を迎えたのは数年前のことだった。

受注から出荷までの工程を一新するため、デジタルシステムを導入。

それまで紙ベースで行っていた帳票管理は、時間も手間もかかり、効率面での課題があった。

システム導入後、現場は大きく変わる。

PC、ラベルプリンター、大型プリンターなどが整備され、出荷業務は格段に効率化された。

――しかし。
新たな問題が、静かに現場に影を落とし始めていた。

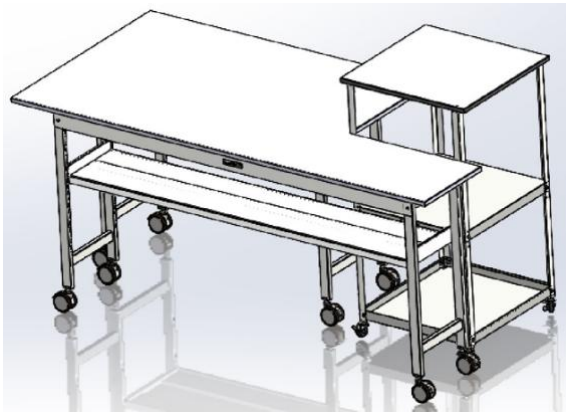
「作業が、やりにくい。」

作業台の上に置かれた大型プリンター。
高さも幅も奥行きも 40～50cm ほどあるその機器は、想像以上に存在感が大きかった。
用紙の取り出し、給紙作業。
どれも一つひとつの動作がスムーズにいかない。
効率化のために導入したはずの設備が、逆に新たな“ロス”を生んでいたのだ。

現場の声は明確だった。

「機器をうまく収めたい」
「もっと作業しやすくしたい」

この 2 つの課題を同時に解決する必要があった。



そこで提案されたのが、
「縦空間を活用した収納」という発想だった。

ポイントはシンプルだが、本質的だった。
プリンターの“サイズ”に合わせるのではなく、
「用紙の取り出し位置」を最適化する。

大型プリンターは作業台の上から外し、専用のワゴンへ。
さらに作業台のコーナーを切り欠き、そのスペースにワゴンを配置する。



この配置により、プリンターの高さは柔軟に調整可能となり、
作業者はほとんど動くことなく、自然な姿勢で用紙を取り出せるようになった。

現場に流れる空気が変わった。

無駄な動きが減り、作業はスムーズに。

「効率化」と「作業性」の両立が、ようやく実現した瞬間だった。
――――現場に笑顔が。







長年培ってきた伝統の味を守りながら、
現場の課題には柔軟に向き合い、改善を続けていく。

株式会社ウメタの強さは、
こうした一つひとつの現場改革の積み重ねにあるのかもしれない。

